

## 動物園の飼育担当者の語りが導く 飼育体験参加者の認識変容のプロセス

町 田 佳世子<sup>1)</sup> 河 村 奈美子<sup>2)</sup> 萬 順 一<sup>3)</sup>  
柴 田 千賀子<sup>3)</sup> 千 葉 司<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>札幌市立大学大学院デザイン研究科, <sup>2)</sup>札幌市立大学看護学部, <sup>3)</sup>札幌市円山動物園

**抄録:**本研究では、動物園が実施する参加体験プログラムの1つである飼育体験において、参加者の認識変容を引き起こす要因を明らかにすることを目的として、飼育体験を担当する飼育担当者が参加者に対して語った内容と、その語りが参加者にどう伝わったかを分析・考察した。方法として飼育体験中の飼育担当者のすべての発話を録音したものと体験後の参加者のインタビューを用いた。飼育担当者の語りの中で本研究では特に飼育担当者と動物との関係に焦点を当てた。飼育担当者が動物との関係について語った内容は、参加者が体験前にいただいていた飼育員と動物との心通じ合う関係というイメージをくつがえす内容であったが、同時にそのくつがえしとは対極にあるような担当動物へのいとおしさも語られていた。それらの一見相反するように見える動物への姿勢は、人間本位ではなくあくまでも動物本位の接し方や飼育の内容についての語りの中で統合され、「生態を知って距離をもっているからこそできる信頼関係」こそが飼育担当者と動物との関係であるという、参加者の新たな認識の形成につながっていることがわかった。

**キーワード:**参加体験プログラム、認識変容、語り、人と動物の関係、飼育担当者

### 1. 緒言

少子高齢化や環境問題、そしていじめや学力低下など様々な問題を抱える現代社会では、学校教育を超えた学びの場や生涯教育の重要性がますます高まっている<sup>1)</sup>。そのためこれまでのフォーマル・エデュケーションの枠を超えて、学校・地域が連動し体験をとおしての学びを提供していくことが必要であり、特に地域の諸施設や団体、ボランティアグループが提供する参加体験型のプログラムは「インフォーマル・エデュケーションの役割を期待」<sup>2)</sup>されていると言ってよいだろう。しかしそのような参加体験型プログラムを評価し、その効果や成功要因を抽出していくことはまだほとんど行われておらず、これからの課題として残されている<sup>3)</sup>。

我々はこれまで環境教育・生涯教育の責任を担う博物館施設の1つであるS市の動物園をフィールドとして、動物園が主催する参加体験型プログラムの飼育体験が参加者の認識や心理的側面に対してどのような効果を生み出すのか、またその効果を引き出す要因は何かについて調査を行ってきた<sup>4-5)</sup>。調査対象とした飼育体験は、参加者が飼育担当者と1対1で行動し午前中の3時間担当動物の飼育作業に携わるというものである。扱う動物は、トラやユキヒョウなどの猛獣、オランウータン、オオカミ、白クマ、ニホンザル、シマウマ、猛禽類、爬虫類、

アザラシなど当日の飼育担当者が担当する動物であれば、あらゆる動物が対象となっている。これらの調査において明らかになったのは、どの動物を担当することになっても参加者達は体験を通して、動物や動物園に対する新しい認識を得たり、体験そのものに高い満足感を得ていることであった。さらに体験直後の参加者へのインタビューから、参加者達は、作業内容や対象動物よりも、一緒に作業をした飼育担当者の言葉や行動、態度、知識に強いインパクトを受け、その結果、作業の意味づけや認識の変容、動物および動物園との関わり方の捉えなおしが生じていることも見出した<sup>5)</sup>。そのような変容を生じさせる主要な要因が、飼育担当者の言葉や動物に対する姿勢に接することであったことは、飼育担当者が参加者の認識変容の「導き手」となっていることを示唆するものであると言える。

しかしそれらの研究は参加者の視点からの認識変容の内容や要因の分析、体験満足度の分析を目的としていたため、飼育担当者が実際に作業中にどのようなことを語っていたのかについては扱っていなかった。そこで本研究では、認識変容の要因を、参加者の事後の主観的印象に基づくのではなく、体験中の飼育担当者の発話から直接抽出することで、より具体的に分析することを試みた。そのことにより、人が体験や学習の対象と向き合い、知識や態度の変容を目指すときに、その場に関わる専門

家や実践家がその変容のプロセスをどう導くのかを明らかにすることができるのではないかと考えている。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象

調査対象は以下のとおりとした。

- ① S市にある動物園が各回10名を定員に年3回実施する「大人の一日飼育係」の参加者
- ② ①の「大人の一日飼育係」を担当する飼育担当者

### 2.2 調査方法

①の調査対象については、協力を得られた参加者に、体験終了後グループインタビューを実施した。インタビューは「今日の体験の感想を自由にお話ください」という質問で始めた。そのことにより特に印象に残ったことが語られると考えた。インタビューはICレコーダーで録音し、インタビュー終了後に文字データとしたものを分析対象とした。2009年度2回、2010年度3回の計5回を調査対象日とした。

②の調査対象については、協力を得られた飼育担当者にピンマイクを装着し、3時間の作業中の発話をICレコーダーで録音した。作業終了後、飼育担当者の発話のみを文字データにした上で分析対象とした。2010年度2回を調査対象日とした。

### 2.3 分析方法

参加者のグループインタビューについては、何らかの認知的・心理的变化が語られている発話だけを抽出し、どのような変化が生じているか、その変化がどのような要因で生じているのかの2点についてそれぞれコーディングし分類した。飼育担当者の作業中の発話については、語られている話題ごとに分類した。

### 2.4 倫理的配慮

本研究での調査は札幌市立大学倫理委員会の承認を得て実施した。①の調査対象 通知 No.0930-2、②の調査対象 通知 No.1007-02。

## 3. 結果

本研究での調査期間中5回実施された「大人の一日飼育係」において、体験後インタビューの協力者は全50名中23名（男性8名、女性15名）であった。作業中の発話録音に協力を得られた飼育担当者は2日間でのべ15名（うち4名が2日間とも録音に協力）であった。以下

飼育担当者の発話録音と参加者のインタビューから、(1)飼育担当者は飼育作業中参加者に何を語ったのか、(2)それらは参加者にどのように伝わり、どのような影響を与えたのかをそれぞれの発話の抜粋をもとに見ていく。

### 3.1 飼育担当者は飼育作業中参加者に何を語ったか

飼育担当者達の語りを話題ごとに分類すると、飼育担当者たちは3時間の飼育体験中、作業内容、動物の生態や特徴などさまざまなことを参加者に伝えていることがわかる。しかし担当動物の種類が異なっているにもかかわらず、動物園において日常行われている動物飼育の作業をするという状況の共通性から、話題にも共通性が見られる。各飼育員によって表現の仕方や強調の程度に違いがあったとしても、多くの飼育担当者が動物の生態、作業内容、自らの飼育哲学などを語っている。本研究ではその中で特に飼育担当者と動物との関係についての語りに焦点をあてる。その理由は、体験後のインタビューで多くの参加者が印象に残ったこととして飼育担当者のことを取り上げていること、参加者の認識変容の内容を分類した結果、飼育担当者と動物との関係や飼育担当者のたいへんさの項目が動物の生態に関する認識の変化について、量的に多かったこと<sup>4)</sup>、そして動物園という人工的な環境の中で動物を飼育するという行為の基本に、動物と人間との関係のあり方が避けて通ることのできないテーマとして存在し、それが飼育担当者の語りの重要な部分を形成しているのではないかと考えるからである。

この話題に関する飼育担当者の語りを見ていく前に、参加者が飼育体験に参加するにあたって動物と飼育担当者との関係についてどのような認識を持っていたのか見ておきたい。参加者は真っ白な認知状態で飼育担当者の話を聞くのではなく、動物と飼育担当者との関係について何らかの想定や期待と照らし合わせながら飼育担当者ややりとりをしている。そしてそのやりとりを通して自らの認識を確認したり、変容させたり、新しい認識を獲得していると考ええるからである。

体験後のインタビューから、動物と飼育担当者との関係についての発話を抽出すると、1つの認識を見出すことができる。それは人間と動物は心が通じ合うというものであり、その認識が語られている抜粋は以下のとおりである。

#### 抜粋 1

何も知らない一般素人だと、動物に対して幻想を抱いている部分があるのかなという感じですね、お世話をすれば絶対、心が通じるみたいな。

## 抜粋 2

本当にちょっと恥ずかしながら、この年まで動物園の飼育員さんというのは、いかなる猛獣であっても、猛獣とお友達みたいな、何かムツゴロウさんみたいなものだと思っていて。

## 抜粋 3

飼育員さんと（動物達が）ふれあって、ほのぼのしたイメージだったんですけど。

これらの発言からわかることは、参加者達が「人と動物は心が通じ合う」という認識をもって体験に参加していることである。では飼育担当者は飼育作業中、参加者に対して飼育員と動物との関係について何を語っているだろうか。収録された語りからは大きく3つの内容が見出された。1つ目は、動物たちにとって人間はストレスに他ならないということ、2つ目は動物と心が通じ合うことはないということ、そして3つ目は、野生動物はどんなに小さい動物でも危険であるということである。たとえ動物が懐いたり肩に乗ってくることがあったとしても、それは餌を与えて育てているからであり、動物に理解されているわけではないことが語られている。それぞれについて以下に抜粋をあげる<sup>※(1)</sup>。

## 1) 動物にとって人間はストレスに他ならない

## 抜粋 4

基本的には、彼らは僕らに構われたくない連中なので、過剰にそうやって構うと、それもストレスになります。（A飼育員-1<sup>※(2)</sup>）

## 抜粋 5

極端にああいう時間（飼育員が獣舎に入り動物を外に出す作業をしている状態）が長く続きすぎると、やっぱりストレスが多くかかってけがをしたりとか病気とか（になる。）（B飼育員）

## 抜粋 6

僕たちも動物に直接触ったりというのはしないんですね。ストレスになるから。（C飼育員）

## 抜粋 7

かわいがって喜ぶのは、本当にペットだけです。ペットというか、犬、猫で、人間にずっと飼われながらやつぐらいですよ。触ったら触っただけストレスなんですからね。（A飼育員-1）

## 2) 動物と心が通じることではない

## (1) 懐くことはあっても理解はされない

## 抜粋 8

（テレビ番組を見ていると）ああ、動物と心が通じるんだなと思うじゃないですか。通じるわけないんですから、どう考えても、そもそも人間同士だって分かり合っていないのに、動物と人間が分かり合うわけないんですよ。僕のこと分かってくれているんだなんて思っていたら大間違いですよ。懐いているというのは、育ててくれたというので懐いているのであって、じゃあその人のことを理解し合っているかといったら、それはないと思いますよ。（A飼育員-1）

## 抜粋 9

〇〇とか△△（猛獣）こそやっぱり（飼育員のことを）食べ物としか見てないんじゃないですかね。やっぱり慣れるということは、人工保育とかをしない限りないですよ。……すきがあったら食べられるだろうし。（C飼育員）

## 抜粋 10

動物を擬人化するというか、こっちが面倒を見ていれば気持ちに通じるんだみたいな感じ。絶対通じないですから。100%それは言えるけど、僕も〇〇と△△と□□を見ていますが、ああ、〇〇と気持ちが通じた、なんていうことは1回もないですからね。（A飼育員-1）

## (2) 肩に乗るのは、生きるため

## 抜粋 11

今僕の肩に乗ってきたのは、〇〇ちゃん。何で僕の肩に乗ってきたかという、別に僕のことを好きなわけじゃありません。どちらかといえばあんまり僕のことを好きじゃないと思います。なぜ乗ってきたかといいますと、〇〇ちゃんにとって僕の肩の上というのは、誰にも邪魔されずに確実に餌がもらえる、彼女にとっては安全な餌場なんですね。動物たち、私たち人間も含めて、食べるというのは生きていく上で非常に大事なことです。〇〇ちゃんのように人間の肩に乗ってまでもリスクを冒してでも餌を食べる。食べるというのはそれだけ重要ということですね。（D飼育員）

## (3) 寄ってくるのは餌のときだけ

## 抜粋 12

〇〇もいつも僕の方を見ているんですよ。餌をやっているからなんですけどね。でも担当が変わったら全

然、見向きもしないですよ。本当に冷たいものだなと思って。(C飼育員)

抜粋 13

餌が欲しくてそばにくるんですよ。ふだんは呼んでもこないんですけどね。餌のときだけ。(E飼育員)

抜粋 14

〇〇くんも、飼育係の人＝リングにしか見えないから。(B飼育員)

3) 野生動物はどんな小さな動物でも危険である

抜粋 15

本当にこの動物たちは結構見てくれとか、かわいい子がもちろん多いんだけど、小さい動物だからって油断をしていると、危ないよという見本ですね。やられるよという。(F飼育員)

抜粋 16

あの□□、小さいけどものすごく力があるから。手を出して引っ張るから。そうすると帽子でも眼鏡でも何でも引っ張って、本当にどすーんとやられちゃうから。(G飼育員)

抜粋 17

この子はこれ以上開けたらすぐ掛かってきます。本当に掛かってきますよ。ここをやられたら、本当に血が、じわっとじゃなくて、びゅーっと吹き出ますね。(H飼育員)

抜粋 18

(かごに入れられている鳥) お客さんにけがをさせちゃったの。あと飼育員も3人か4人けがしている。飛び掛ってくるの。(E飼育員)

抜粋 19

僕らが見ているのは、ペットではないということは確実に思わないと、最悪、ウサギぐらいにかまれても別に死にはしないですけど、チンパンジーとかにこうやって手を握られただけで、ぐしゃっと握りつぶされるぐらいの握力は持っているの、そういう危険な動物と向き合っているんだなというのを、常に仕事をする上で持っておかないと。(A飼育員-1)

動物にとって人間はストレスであり、動物と人間は心が通じ合うことはなく、動物は大きさにかかわらず危険

であるという語りは、参加者が描いていた飼育担当者と動物たちの心が通い合ったほのぼのとした関係という認識を否定し、根底からくつつがえしてしまう。これだけを聞くと飼育担当者と動物たちとの関係は緊張感があり、飼育担当者はさめた目で動物をみているという印象を与えるかもしれない。しかし同時に飼育担当者はその姿勢とは一見対極にあるような、動物たちに対する愛情や愛着、いとおしくてたまらない様子も見せるのである。それらは作業中に動物に話しかける様子、つい甘やかしてしまうという本音、担当する動物の自慢、そして生きていてほしいという必死の思いとして語られている。

抜粋 20 (話しかけ方)

〇〇、ほら、おやつ持ってきたよ。はい、ここにあるからね。(H飼育員)

抜粋 21 (話しかけ方)

△△ちゃん、△△ちゃん。□□君、□□君。かわいいね。(A飼育員-2)

抜粋 22 (話しかけ方)

はい、あーん。もらいな。あーん。おいしい? あーん。(G飼育員)

抜粋 23 (甘やかしてしまうという本音)

やっぱり食べてもらいたいから、どうしてもこういう風に甘やかしてしまいます。だめですね。ありのままの姿をみせなきゃならないのにね。(E飼育員)

抜粋 24 (自慢)

僕も結構ほかの動物園へ行った△△(動物の種類)を見ましたけど、〇〇(現在自分が担当している動物の名前)ほどいい雄はいないですね、やっぱり。かなりハンサムなんです。そしてこの雰囲気もいいんですよ。(A飼育員-1)

抜粋 25 (自慢)

(担当動物の顔立ちについて) あれだけかわいいのはあり得ないですからね。(A飼育員-1)

抜粋 26 (自慢)

(自分が担当する動物の中に) 100%人工保育の雌がいて、それが赤ちゃんを産んで、ちゃんと子育てしているんだわ。彼女は頭がよすぎて、こんな子供だとか女の人、結構、へって。自分の方が上というか。(G飼育員)

## 抜粋 27 (手がかかるほど愛着が)

この時期とかは食欲なくして、ぜんぜん餌に手をつけないんですけど、この間まで手で食べさせるんですよ。だからそういうのをやっているとなつぱり本当に愛着がわく、愛着というか、かわいいなと思ってきますよね。手間がかかるほどやつぱり。(C飼育員)

## 抜粋 28 (生きていてほしいという必死の思い)

母親はこころで亡くなっていたんですよ、その背中にこの子が乗っていて、子供は生きていたという感じなんだけど、本当に初めのうちは、もうかわいいとか、かわいそうとか、そんなのどうでもないんですよ。もうとにかく死ぬな、死んじゃあかん、生きろみたいな。(F飼育員)

これらの抜粋で表現されている動物に対するいとおしさや愛着、必死の様子は、動物に対する冷静な視点と相反する姿に見えるかもしれない。

しかしこのように一見矛盾しているかのような態度も、動物をただかわいい存在としか見ないでかわいがることと、動物と人間との関係を承知した上でかわいがることは違うという語りの中で、矛盾ではないことが浮かび上がってくる。

## 抜粋 29 (動物との関係を理解している人には担当動物をなでている姿を見せられるが)

〇〇はあんなにかわいい顔をしているけど怖いぞと、そこまで(一般の人たちが)理解してくれているんだったら僕もやりますよ(動物をなでていますよ)と言うけど、たいがいの人は、かわいいとしか見ない、かわいいか、かわいそうか、そういう見方しかないの、そういう人に対して、僕らもなでていますなんて言ったら、ああ、やつぱり飼育員さんもやっているんでしょうみたいな感じになってしまうので。(A飼育員-1)

## 抜粋 30 (金魚の水を毎日換えるのは金魚にとってストレスという話題の中で)

水がきれい、ああ、この人たち(金魚たち)もいいなと思っているのは人間だけで、実は金魚にとっちゃ最大のストレスなんですね。……だから、金魚1つとっても、本当に金魚のことを考えているんなら、こまめに換えるというのは単なる人間の都合ですよ。……かわいがっているというの、ペット感覚というか、だからもったいないのは、そこまで好きなんだったら、金魚はどういう生活スタイルをしているのかという状態まで突き詰めて考えて水を換えるのは、換えるでも

いいんだけど、換えるというだけでも金魚にとってはストレスですからね。(A飼育員-1)

これらの語りでは、動物をただかわいい存在としか見ない場合のかわいがり方は、人間本意のかわいがり方や愛情の注ぎ方になりがちだが、動物と人間の間隔を理解した上でかわいがるならば、動物本位の姿勢を持って愛情をそそぐことができること、そしてそれらは本質的に異なった姿勢であることが述べられている。そして一見対極にあるように見えた、動物への冷静な視線といとおしくてたまらない様子は決して相反するものではないことにつながる。

動物と人間の間隔を理解した上で行う飼育が、動物本位の飼育となることは、飼育担当者が自分たちの飼育について語る内容を見ていくとより明らかになる。飼育担当者は、動物にとって人間がストレスに他ならないのであれば、いかに動物たちにストレスを与えないように世話をするか、もしくはそのストレスを少しでも軽減するためにどのような工夫をしているのかを語る。その工夫は、たとえりんごを細かく切ることが動物にとって余計なことであっても、食べる時間を長くすることで動物たちのストレスが和らぐのであれば細かく切って与えること、同じ空間に人間がいることがストレスであれば、掃除はできるだけ手早くすることなどである。以下にそれらの抜粋をあげる。

## 抜粋 31 (嫌がられても「余計なこと」をする)

(りんごなどの餌を細かく切る作業をしながら)  
(動物は)餌を食べている時間が楽しい時間で、一番ストレスを解消している時間なんですけど、じゃあ、あなたたち、楽しい時間なんだからゆっくり食べなさいと言っても食べるわけがないんですね。なるだけ楽しい時間というのを長く過ごしてもらいたいの、悪く言えば、これはわざと食いつらくしているんですね。だから〇〇からしてみれば、あいつ何、余計なことをしているのよと思っていると思うんだけど、それが実は餌を食べる時間が長くなるんだよという意味においては、ちょっとは〇〇の精神的ストレスが和らいでいるのかなという気はしていますよね。(A飼育員-1)

## 抜粋 32 (作業も手早く)

(掃除のときは)動物と飼育員が同じ空間にいるという状態になるので、一番、動物にストレスがかかっているときなので、たとえ掃除をするんだと思っていても、お前のためにきれいにしているんだぞではなくて、極力、さささとやって、動物にストレスを与え

ないというのが一番大事ですね。(A飼育員-1)

抜粋 33

ああいう状態(飼育員が獣舎に入り動物を外に出す作業をしている状態)というのは、明らかに精神的ストレスがかかっている状態だから、なるべくああいう時間も短くしてあげるということが大切。(B飼育員)

抜粋 34 (少しでも動物本来の状態を維持できるような環境をつくる)

何でこんな細かいのをまくかということちゃんと理由があって、〇〇って1日中かけて山の中で木の実だとか木の種だとか、すごい細かいやつだとか探して食べているんですね。それを忘れさせないために、探して食べるということをやらせているんですね。(D飼育員)

抜粋 35 (少しでも動物本来の状態を維持できるような環境をつくる)

どんぐりを植えたんですよ。〇〇、どんぐりが好きなんです。それで植えたんですけど。(I飼育員)

抜粋 36 (人よりも動物を第一に)

動物園ですから、見世物小屋じゃないので、たたき起して引っ張り出してということはしないですね。あくまでも動物の時間に合わせて飼育をするというのが基本です。(H飼育員)

抜粋 37 (人よりも動物を第一に)

お客さんと動物だったら、僕は間違いなく動物を取るもので。動物園なので、お客さんに見せなきゃいけないということはあるんですけど、僕はどっちかと言えば動物のストレスの方が気になるので。(少しでも行動空間が広くなるよう来園者から動物が見えなくなる部屋のドアも開けて動物が自由に行き来できるようにする)(A飼育員-1)

もし愛情や愛着という感情だけで動物と接しているとすれば、動物の嫌がることはしない、ていねいに掃除をすることが動物のため、甘やかして手をかけすぎ動物の本性を失わせてしまうということが起きるかもしれない。しかしそれは人間本位の飼育でしかない。動物と人間との関係について冷静な認識をもっているからこそ、人が介在するストレスを和らげるという視点からの飼育を行い、またそれを語ることができるのである。さらに動物たちのストレスを最小限にという観点からだけでは、飼育の実践も語られている。

抜粋 38 (手間をおしまない)

あの上(ふんの上)を歩いたりするので、この子たちは自分で汚いとは思っていないのかもしれないですけど、仮に手とかをけがしたりして、その状態でふんを踏んでしまったら、完全に化膿してしまうこともあるので、やっぱり掃除も手は抜けないというところですね。(A飼育員-2)

抜粋 39 (手間をおしまない)

動物にやってあげたいことがたくさんありますから、それをしっかりやるということですね。(H飼育員)

抜粋 40 (手間をおしまない)

冬は暖房で乾燥しちゃうので、このミスト作業がすごく大事なんです。これを1日何回もやって、常時湿度を維持しないと死んじゃうんですね。(J飼育員)

抜粋 41 (時間をおしまない)

飼育員って結構、朝が早いんですね。……7時半ぐらいには来て、動物を朝日に当てているんですね。(H飼育員)

抜粋 42 (汚い仕事もいとわない)

自分の部屋だと思って…と言われた。先輩には、お前の部屋にうんこが落ちていたらうれしい？ うんこがなくなるまで掃除するでしょうと言われたら、そうですね。(B飼育員)

抜粋 43 (動物の行動から状態を読み取る)

言葉をしゃべらない動物の行動を見て、その動物が何を考えているか、どうしたいのかこうしたいのかということを、やっぱりこっちが読み取っていかなきゃならないんだから。(B飼育員)

抜粋 44 (動物の行動から状態を読み取る)

餌の担当の職員というのがいますから、我々はその人に、こういうものを今まで買っていてもらったけど、例えばちょっと中身に入っている種が大き過ぎるから違う種類に変えてくれたとか、動物がちょっと年老いてきたから、もうちょっとこういうものを買ってくれとかというのは、動物に聞いて、その餌係に伝える。(H飼育員)

抜粋 45 (動物の行動から状態を読み取る)

動物を観察して、繁殖のタイミングとか、もろもろのことを考えたり、体調不良になったときに早めに治療

を開始するとか、体調が悪くなってから開始しても死にますから、動物は最後まで我慢していますからね、平常心を保っていますから、鼻水が出た時点で治療を開始するというのが鉄則ですね。私は1日にだいたい14～15回ぐらいそんなこと（定時観察）を繰り返していますね。（H飼育員）

これらの語りから、たとえ心が通じ合うことはないとしても愛情を持って手間をおしまず汚い仕事もいとわず、動物たちの健康を守るために動物の行動を十何回と観察する懸命な飼育のプロの姿が浮かび上がってくる。

### 3.2 飼育担当者の語りは、参加者たちにどのように伝わったのか

ここまで飼育作業中の語りから、特に飼育担当者と動物との関係に焦点をあて、語りの内容を抽出してきた。3.1では、飼育担当者は動物たちに対して自らの存在はストレスでしかないこと、そして動物と心が通じ合うと思うのは人間の側の思い込みにすぎず、懐くことと心が通じ合うことを混同しないこと、野生動物は大きさにかかわらず危険であることを、さまざまな表現で語っていた。これらは体験前に参加者が抱いていた飼育担当者と動物たちのほのぼのとした、心が通じ合う関係という認識をくつがえすような内容である。そしてそのような冷静で客観的な態度とは一見矛盾するような、動物たちに対する愛情やいとおしさも語っている。また人間がストレスであるという動物と人間の間隔を認識しているからこそ、少しでもストレスを和らげる飼育の方法や動物の生態を理解した上での動物本位の飼育の工夫も語られていた。これらの飼育担当者の語りは、参加者たちにどのように伝わったのだろうか。体験後のインタビューから、参加者が飼育担当者と動物の関係に言及している発言を抽出し、認識がどのように変化したのかを見ることでこの問を考えてみたい。

以下の抜粋に示すように、参加者は飼育担当者と動物との関係について自らの認識が変わったことを語っている。

#### 抜粋 46

単純にかわいいから、すごいかわいがるじゃなくて、ある程度生態を知って距離をもってるからこそできる信頼関係みたいなものがすごいなあと思って、つい自分だったらもうかわいい！ と思ってやっちゃいなものを、かわいいのはかわいいけどこういう性格だからってところがすごく勉強になりました

#### 抜粋 47

飼育員さんがどんな距離感を持って、ペットでもない、家畜でもない、本来なら野生にいたるべき動物と接しているのかという距離感がわかったような気がして勉強になりました。

#### 抜粋 48

飼育員さん達がみんな あの子とかこの子とかっていうとても愛情にあふれる表現というか言い方をしている、でもべたべたする感じではなく、動物園の動物なんだけれども過保護でもなく個を尊重している感じでもって勉強になりました。

抜粋 46の「かわいいからすごいかわいがるじゃなくて、ある程度生態を知って距離をもっているからこそできる信頼関係がすごい」という表現の中に、飼育担当者が語ってきた動物との関係、動物本位の接し方、そして動物に対する愛情についての理解が凝縮されているのではないだろうか。抜粋 48でも、愛情にあふれた表現をしている一方で、べたべたしたり過保護になっていない、だからこそ個の尊重、言い換えれば動物ごとの特性を尊重した動物本位の接し方になっているという認識が形成されている。抜粋 47は新たな認識を「距離感がわかった」という言葉を用いて表現している。いずれの抜粋も「(すごく) (とても) 勉強になりました」という表現で終わるという共通点を持っているのは、飼育担当者と動物がそのような関係であることを知ることが参加者にとってこれまで持っていなかった新しい認識を獲得した経験であったことを示していると考えられる。同時に、「すごく」「とても」という表現は、それを知ったことに対する満足感を示唆しているのではないかと考える。

飼育担当者の語りがこのように参加者に伝わり、体験後に強く印象に残ったこととして語られるのはなぜだろうか。すでに述べてきたように、飼育担当者の語りの中で、動物にとって人間はストレスであり、動物は危険であり、懐くことはあっても心が通じ合うことはないという内容は参加者の体験前の認識をくつがえすものであった。一方で動物に対する愛情やいとおしさは、体験前の認識と重なり合うものである<sup>註3)</sup>。飼育担当者の語りは参加者にとって自己の1つの認識が否定されくつがえされると同時に、別の認識は確認され強化されるという両方の経験を含むものであったと言っていいたいだろう。さらに確認された認識、すなわち飼育担当者は動物達に惜しみなく愛情を注ぎかわいがっていることについての認識も、飼育担当者による動物本位の姿勢を貫いた手間をおしまない飼育の仕方、それを支える動物との関係のと

らえ方を聞くことにより、単にかわいがることとは違う愛情として意味のとらえなおしが生じている。そのことが「かわいいからすごいかわいがるじゃなくて、ある程度生態を知って距離をもっているからこそできる信頼関係」という動物と人とのあるべき関係という新しい認識形成を実現させたのではないだろうか。ある認識のくつがえし、別の認識の確認と意味の変化、そしてそこから新たな認識の構築というプロセスが生じる場が飼育担当者の語りによって作られ導かれているのである。

さらにこのような体験を通して参加者の認識変容が引き起こされただけでなく、その結果として動物園に対する態度にも変容が生じていることも見ておきたい。

#### 抜粋 49

世話していらっしゃる飼育員さんの仕事だとか、それから動物園の方々が、来られるお客さんのためにいっしょうけんめいいろんなことを準備されているっていうのを、少し見せていただいて、それじゃあ動物園という施設に行かなきゃいけないのかなって、行って、みなさんが準備してくださっているのに応えるっていうんでしょうかね、そういうふうにしていくのが、今度は外側に出たお客としての私達のやるべきことなのかと。お客の側としたら、足しげく通って、みんなでいこうよ、って、そういうふうに宣伝を私もしたいなという気持ちになりました。

#### 抜粋 50

やっぱり飼育員さん、スタッフというのはものすごい苦労だと思うんですよ。それを少しでもわかって他のもの、家族のものに伝えていければね、こういうもんだによってことで足を運んでもらえるのかなって。

これまでは来園者という立場であった参加者が、今度は動物園の協力者として、飼育担当者や動物園のスタッフの努力や苦労の伝え手となり、周りの人たちに動物園を宣伝する役割を担わなければならないという態度の変容が生じているのである。

#### 結語

本研究は、環境教育・生涯教育の役割を担っている動物園が実施する、参加体験型プログラムの1つである飼育体験において、飼育体験を担当する飼育担当者が参加者に対して何を語り、その語りが参加者にどう伝わったのかを、飼育担当者と動物との関係を中心に見てきた。方法として飼育体験中の飼育担当者の語りと体験後の参

加者のインタビューでの語りを録音し、文字化したデータを用いた。飼育担当者が動物との関係について語った内容は、参加者が体験前にいただいていた飼育員と動物との心通じ合う関係というイメージをくつがえす内容であったが、同時に担当動物へのいとおしさも語られていた。それらの一見対立するように見える動物への姿勢は、人間本位になりがちな動物への姿勢を否定し、動物本位の接し方や飼育の内容の語りを通して統合され、「生態を知って距離をもっているからこそできる信頼関係」こそが飼育担当者と動物との関係であるという新たな認識を参加者に形成していることがわかった。

今後は、子どもを対象とした飼育体験プログラムの飼育担当者の語りを分析し、子どもにどのような認識の変容が起きているのか、またそれは飼育担当者のどのような語りかけから生じているのかの検討を進めたい。また本研究で示唆された参加体験型プログラムの認識変容のプロセスとその導き手となる専門家・実践家の役割が、自然体験などの異なる体験プログラムにも適用されるのかを検証していきたいと考えている。

#### 謝辞

本研究のためにインタビューに同意し協力いただいた「大人の一日飼育係」の参加者の皆様にお礼申し上げます。また3時間にわたる飼育作業中マイクをつけてすべての発話を録音することを快諾いただいた飼育担当者の皆様、そして本研究の趣旨を理解し、フィールドを提供くださいましたS市の動物園のスタッフの皆様にお礼申し上げます。

本研究は2010年度札幌市立大学共同研究費の助成を得て実施しました。記して感謝いたします。また2011年度からは文部科学省科学研究費（基盤C23501226）の助成のもとで実施しています。

#### 注

- (1) 抜粋中の〇〇などの記号は個々の動物の固有名、または動物の種類をふせるために用いている。〇〇と同じ記号で表記していても抜粋ごとに指示対象は異なり、同じ動物や人物を表しているわけではない。
- (2) A飼育員-1, A飼育員-2の表記は、同一の飼育員による、参加者の異なる2回の飼育体験での録音であることを表している。
- (3) 体験前の認識とのずれがないことは、「やっぱり（人間に対するのと）同じように愛情こめて、きちんとその子のそれぞれの状況をみてあげている」（本文中には掲載していない参加者の発話）等の「やっぱり」の部分に示唆されている。



## 文献

- 1) 文部科学省平成 18 年度科学技術基本計画
- 2) 寺田安孝・山本太郎・川上昭吾：地域・学校・博物館との連携によるインフォーマル・エデュケーションの実践. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 10：85-90, 2007
- 3) 菊田融：動物園の社会教育施設としての可能性. 社会教育研究 26：43-57, 2008
- 4) 町田佳世子・河村奈美子：動物園飼育体験における参加者の認知的・心理的変容とその要因の解明. 札幌市立大学研究論文集 5 (1)：45-52, 2011
- 5) 河村奈美子・町田佳世子・萬順一・柴田千賀子：動物園における飼育体験を経験した市民の印象の変化—子どもと大人の印象の比較. ヒトと動物の関係学会第 17 回学術大会抄録集 29, 2011